

大森 絢未  
OMORI Ami



私のリアリティーとファンタジー  
布地 綿、ポリエステル・昇華転写



## 私のリアリティーとファンタジー

服を創ること、理想の自分になるために装う行為は同じことではないか。制作を振り返ると、手法は異なるが自身の理想の姿を誇張して服に描いている。これまでの自身の作品には、フリルやリボンといったモチーフを多用しており、私にとってこれは少女の象徴である。これは、幼い頃からギャザースカート、衿周りにフリルの着いたブラウスなどをたくさん持っていたことが大きく影響している。

服飾史において、フリルやレース、大きなリボン、ギャザー（布を縫い寄せた状態）などの装飾と呼ばれるものは、布を惜しげもなく使用することから富や権力の象徴として、貴族や身分の高い人が身に付けてきたものであるが、現在の日本では、「可愛い」の記号として、服だけではなくさまざまなものに用いられている。時代を経て、洋服の歴史の短い国では、洋服の歴史の長い国とは異なる解釈をされているように見受けられる。また、成熟した大人の女性であることが求められる欧米において、cute といった表現は子供っぽいと捉えられ大人の女性に使うことは失礼とされる。しかし、日本では何歳になっても可愛いと言われることを好む傾向にあり、受け入れられている。

「いくつになっても可愛い存在でいたい」と思う国民性により少女性をいつまでも追い求めることが許容されているのではないか。

私は、社会において大人として扱われる年齢である。しかし、「少女性」は大人になってから生まれるものではないかと考える。自分自身が少女ではなくなったからこそ、その存在を俯瞰することで、年齢に関係なく、「現実」と

「空想」、「子供」と「大人」、「自由」と「制約」などの2つの相反するものの境界で揺れ動くさまがそうであると考えた。いつまでも可愛い存在でありたいと理想の自分を思い描き、現実を生きるために私たちは少女を装う。